



防災・減災を

いま、考える



東日本大震災から3年。全国各地で猛威をふるう台風、大雨、大雪、地震など、大きな被害を伴う自然災害が多発しています。

本市においても姉川地震（明治42年）や琵琶湖洪水（明治29年）、伊勢湾台風（昭和34年）、度重なる田川の氾濫など、過去には大きな被害が発生しています。

そして現在は「柳ヶ瀬・関ヶ原断層」や「琵琶湖西岸断層帯」など内陸の活断層が引き起こす大地震や、東南海・南海地震など大規模な地震が想定されており、また、異常気象ともいえる局地的大雨や突風も頻発し、そのたびに身の危険を感じ、不安を抱く人も多いのではないだろうか。

災害は忘れたくない

災害の記憶や教訓は風化しやすく、危機に備えていなかったことで被害が拡大したケースもあります。

防災・減災対策の基本は、行政が取り組む「公助」、地域の安全は地域で守る「共助」、自分の命は自分で守る「自助」をバランスよく高めていくことにあります。

大切な命と財産を守るため、今何をしなければいけないか、一緒に考えてください。あなたの備えは大丈夫ですか。

湖北町速水は、485世帯1573人、隣組40組（8月1日現在）からなる大きな自治会です。阪神・淡路大震災以降、自主防災組織の重要性が全国的に見直され、速水でも平成13年に自主防災組織「速水自主防災会議」を設置。平成23年には専門的に防災活動を進めるため、さらに「防災委員会」を立ち上げ、住民同士の互助精神に基づき、火災やその他の自然災害から被害を防止・軽減することを目的に様々な取り組みが進められています。



速水防災委員会 委員長 杉田信男さん
元湖北町消防団長。今年、春の叙勲「瑞宝単光章」を受賞。

共に助け合える地域・活力ある地域づくりをめざしています。速水は自治会が大きく、住宅地の開発とあわせて、転入される人も増えています。また、時代の変化とともに近所同士の関わりやコミュニティ意識の希薄化を感じる面もあります。「向こう三軒両隣」という言葉があるように、顔の見える者同士、お互いに助け合える関係が大切だと考えています。福祉や教育などの充実も命あつてのもの。命にかかわることだから真剣に考えることができるし、お互いを思う気持ちにもつながり、防災は地域がひとつになれるのだと思います。

活動の目標

私たちの活動の前提は、自分の命は自分で守ることです。その上で、皆が「助け合える」「声を掛けあえる」環境や体制を作っています。そして、一人ひとりの減災意識と共に、こうした活動が一つの活動で終わらないよう、行動できる人・指示できる人を一人でも多く育てたいと思っています。さらには、行政や消防本部との連携も欠かせない要素です。

自助・共助・公助の歯車がうまくかみあい、いつ災害が発生しても困らないように備えや対策を進めていこうと考えています。また、自治会員向けに防災新聞を随時発行し啓発を行っています。目的意識をもって継続して取り組むことで防災意識が高まり、地域防災力の高まりへとつながるものと考えています。

主な活動

年間を通して訓練や講習会、関係データの更新を行っています。具体的にあげると、①火災、地震、水害を想定した防災訓練や防災講演会②町内に72箇所ある消火栓の点検、修理、操作訓練③防災資機材の点検、管理、購入④もしもの時の心肺蘇生訓練⑤防災関連施設やAEDなどを落として込んだ防災マップや要援護者登録リストの更新⑥活動が継続できるように非常時の体制づくりを柱にしています。

防災訓練は毎年5月に実施しています。訓練では、まず宅内訓練から。ガスの元栓閉めやブレーカーの遮断、家族や隣近所の安否確認などを行い、組ごとにあらかじめ決められた一時避難所へ向かいます。その際、要援護者宅に向き安全確認も行います。年1回のことですが、どれも身を守るための基本であり、繰り返し行うことで、いざというときに慌てず迅速に行動することにつながると考えています。



▲防災訓練で速水小学校(指定避難所)に集まる自治会の皆さん



▲真剣な表情で心肺蘇生訓練に参加する人たち

命を守る自主防災活動

速水自治会では、地域をあげて人命を守るため、「防災」を最優先の活動と位置づけています。「防災は地域づくり」と捉え、防災活動を通して、